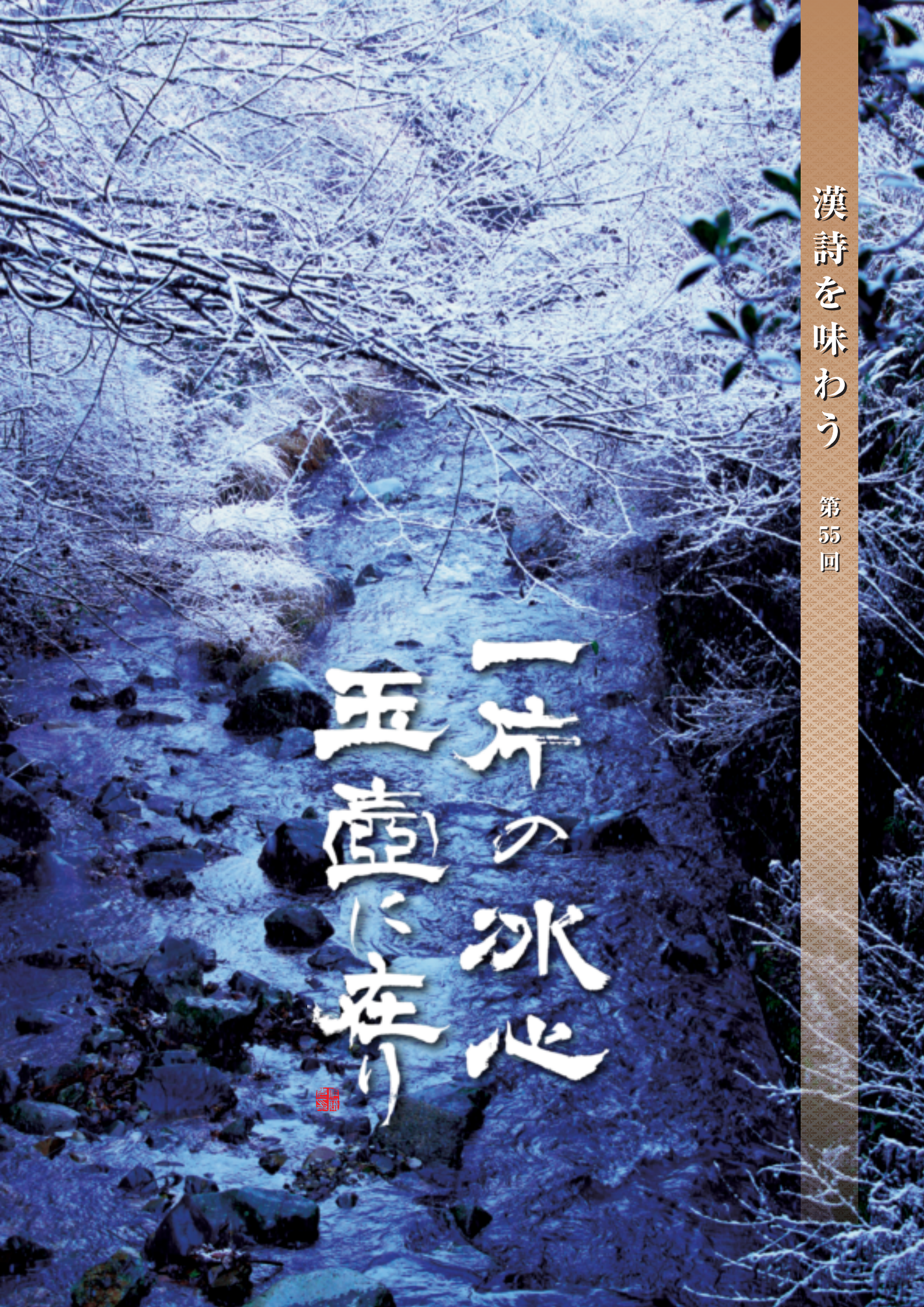


漢詩を味わう

第55回

芙蓉楼送辛漸（ふようろうにてしんぜんをおくる）

王昌齢（おうしょうれい）

寒雨連江夜入呉　寒雨（かんう）江に連なって夜呉（よるご）に入る
平明送客楚山孤　平明（へいめい）客（かく）を送れば楚山孤（そざんこ）なり
洛陽親友如相問　洛陽の親友　如（も）し相問（あいと）わば
一片氷心在玉壺　一片（いっぺん）の氷心（ひょうしん）玉壺（ぎょくこ）に在り

冬の冷たい雨が長江の水面もわからぬように降りしきっている中を昨夜、君とともに呉の地に入った。
夜明け方に、旅立つ君を送ろうと外へ出ると空は晴れ渡り、君の行く手には楚山がただひとつぽつりとそびえている。
もし洛陽にいる親友が私の近況を尋ねたならば、こう答えてくれ。
ひとかけらの氷が玉づくりの壺の中にあるような清らかな心でいるよ、と。

《寒　雨》冬の雨。詩では冬の風を「寒風」冬の山を「寒山」というように冬雨とはふつう言わない。
《連　江》雨と水面の境目がわからないように長江に雨が降るさま。
《平　明》夜あけ方。
《客》旅人。ここでは辛漸をさす。
《楚　山》当時この辺一帯は楚の地で、呉は今いる場所で長江の対岸あたりの山を指す。
《氷　心》氷のような清らかな心。
《玉　壺》玉製の壺。六朝の詩人鮑照の「清らかなること玉壺の氷の如し」に基づく。

芙蓉楼というのは潤州（今の江蘇省鎮江市）にあった旅館です。ここは長江の南岸にあって舟旅の宿場になっていて、ここから長江を横切って対岸から運河用の船に乗り換えました。この芙蓉楼では常に送別の宴がはられていたといわれます。
この詩は王昌齢が江寧の丞（じょう）をつとめていた頃の作で、芙蓉楼で辛漸の送別の会を催した時に贈った詩です。
王昌齢と見送られる辛漸は、長江の上流の方からここにやって来て一泊し、翌朝早くに辛漸は旅立つのです。起句の解釈はここでは、二人が川に注ぐ雨脚が激しい夜になって呉の国へ入って来たとしましたが、夜に呉に入るのは雨だととる説もあります。上流の方でザーッと降ってきて川の水とひとつになってやがて呉の地方に流れ込んできたとの解釈です。何れにせよ「寒雨」という言葉が、この場の雰囲気を示すと同時に、いかにも寒々として、この詩の全体の象徴的な語になっています。
第二句の「平明、客を送れば楚山孤なり」と表現した楚の地方の山がぽつんと見えるさまは、辛漸が地方で志を適えられず、悄然と洛陽に戻ることを暗示しているようです。
そしてこの詩の眼目はなんといっても結句の「一片の氷心、玉壺に在り」にあります。この一句で王昌齢の心の内をすべて表しきっていると言えます。
王昌齢は二十七歳で進士に合格し、校書郎から河南省汜水の尉になりましたが、この時は左遷されて江寧の丞という地方官庁の低い官品に甘んじていました。もし洛陽で親友がぼくのことを聞いたならば、といっておいて、他国にある思いをのべるでもなく、官位のことをいうのでもなく、玉壺にある氷片のような心境だ、どうぞ心配しないで頂きたいと伝言したのです。こう言い切った一句には無限の重みと爽快感が感じられます。また同時に旅立つ辛漸をなぐさめ励ますものだったと思われます。
王昌齢は七言絶句の聖人と呼ばれ「詩家夫子王江寧（しかふうしおうこうねい）」といわれましたが、安禄山の乱がおこったときのどさくさに殺されました。

参考文献：唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・漢詩要解（有精堂）・漢詩の世界（大修館書店）

日暮れて蒼山遠く　天寒くして白屋貧し　柴門に犬の吠ゆるを聞く　風雪夜帰の人

《大意》日が落ちて暮色蒼然となった山路は遠く寒い。やっと一軒の貧しい民家に一夜の宿を借りることができてやれやれと思っていると、柴の折り戸で犬の吠える声が聞こえる。この吹雪の中を夜遅く帰ってきた人があるらしい。

（劉長卿詩・雪に逢って芙蓉山主人のもとに宿る）

夜静かに渓声近く　庭寒く月色深し

《大意》夜は次第に静まって谷川の響きが近くに聞こえる。庭は寒々として月の色は深く冴え渡っている。（厳維詩句）

読み　獨り釣る寒江の雪（只ひとり小舟を浮かべて冬の川の雪降りのなか釣りをしている・柳宗元「江雪」）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

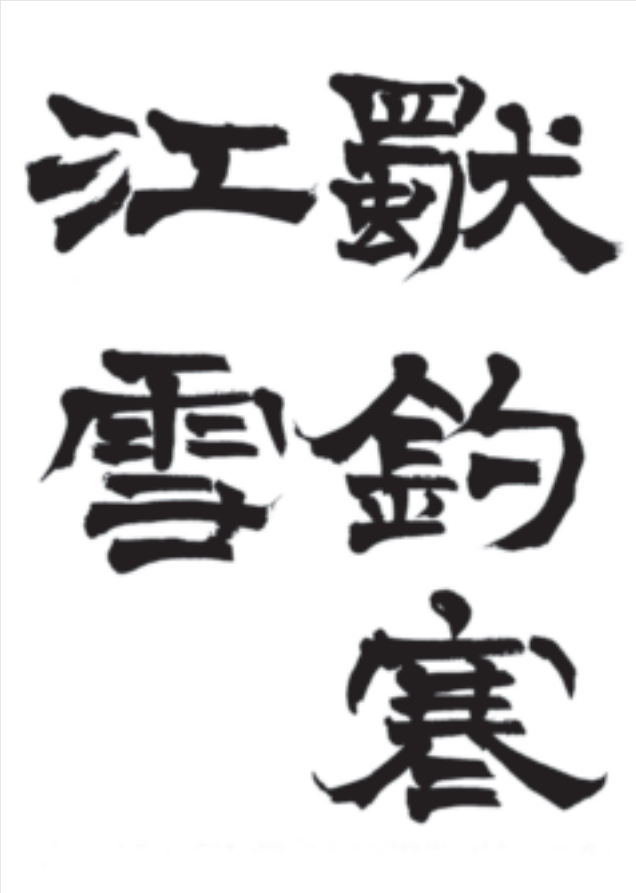
行　書

草　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書



次号課題

青陽初正を兆（きざ）す

ペン字部課題　（12月26日〆切）

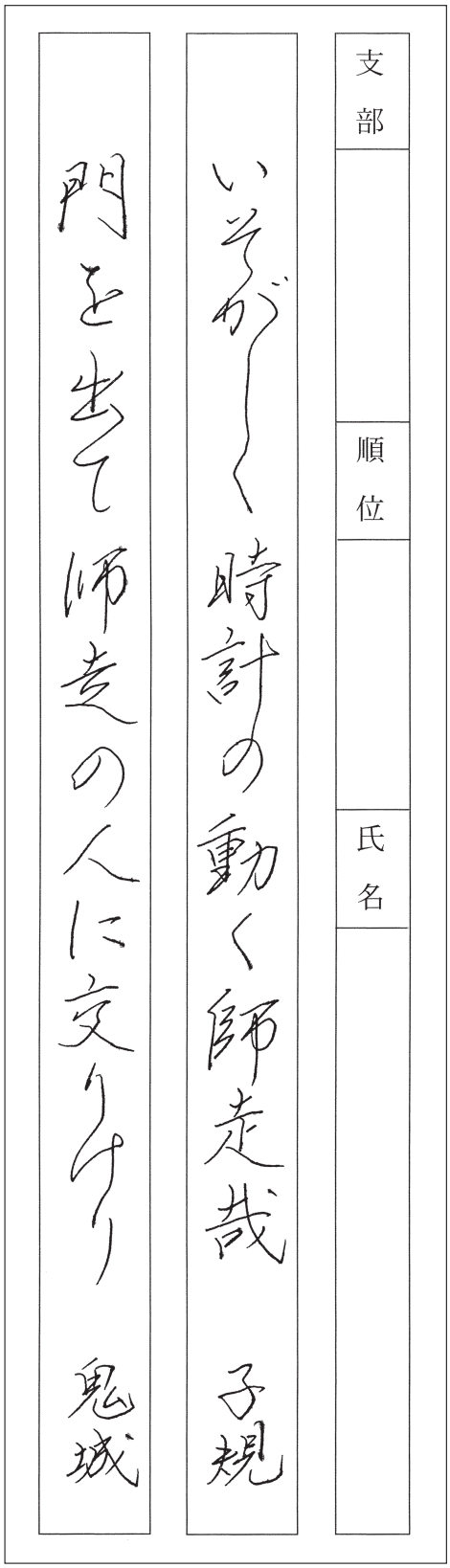
細字部課題　（12月26日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

音　ネンシマイサイ　ギキロウヨウ

略解　月日は刻々と過ぎてゆきふたたび帰ることはない。太陽は照り輝き、月は光り影をうつして万物をめぐむ。



和泉溪石先生書

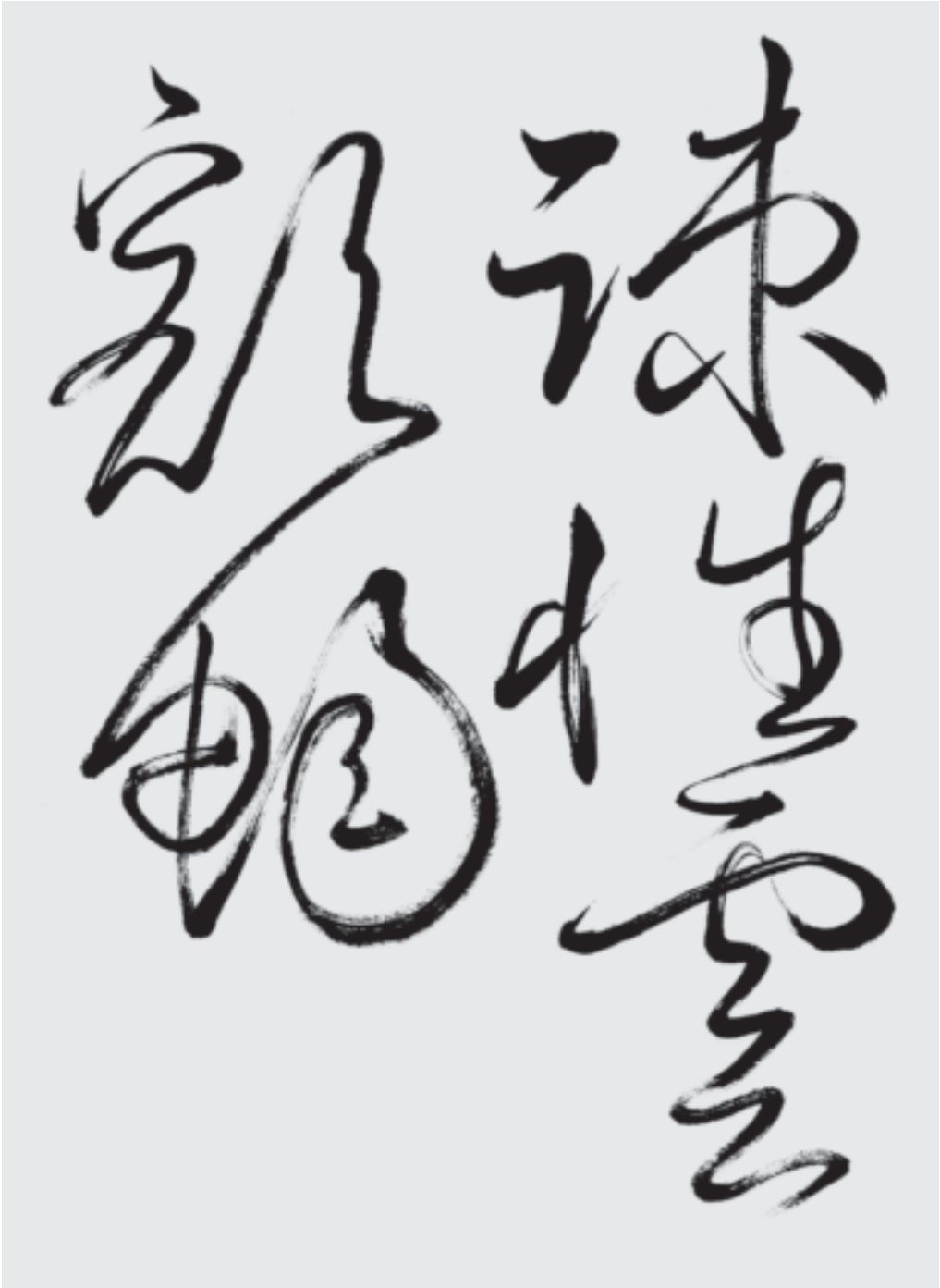
象の顕れて徴す可ければ……

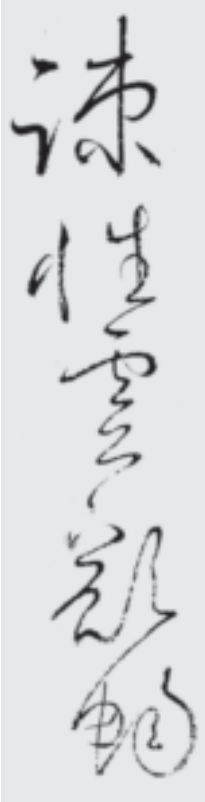
■褚遂良・雁塔聖教序（初唐・西暦六五三年）の臨書(15)

象雲臨

『象顯徵可』

この度の秋季昇格試験の楷書古典臨書課題はこの雁塔聖教序でしたが、応募作を拝見すると、結体として整っている作品は大変多かったのですが、線質の再現に成功した作品は少なかったように感じました。初唐は楷書が完成したとされる時期ですが、三大家（欧陽詢・虞世南・褚遂良）の特徴をきちんと理解し区別して表現できれば、楷書の基礎は備わったといっても良いと思います。褚遂良のこの雁塔聖教序の最大の特徴はなんといっても、軽妙な細線を駆使し変化に富んでいて奔放に見えながら巧みに調和しているところです。今回の四文字も、実際に臨書してみるとその完成度の高さに感服させられます。米芾は雁塔聖教序を「戦馬を自在に馭する」とたとえましたが実に的を射た表現です。





（疎）性霊豁暢なり

象雲臨

■懐素・自叙帖（中唐・西暦七七七年）の臨書（7）

『疎性霊豁暢』

四頁に狂草で懐素の先駆をなす張旭を取り上げましたが、そこで述べたように張旭は「郎官石記」という王羲之風の伝統的な書法で書かれた楷書作品を残しています。そしてこの楷書が張旭の狂草の基礎となっているといわれます。これと同様に懐素は、千字文を単体の草書で淡々と書いた草書千字文という作品を残しています。古来より一字千金の価値があるという意から「千金帖」とよばれるものです。これは自叙帖よりも後に書かれたものですが、技巧の細やかな点では、孫過庭の書譜にも劣らず格調の高い作品です。

今月の四文字を見ると、狂草とは言われるものの可読性も失われず、一字一字が非常に確かな結体です。草書の要諦の一つである連続した線の流れも自然で、線の交差が明快なため空間が広く爽快な印象です。